

4. 木綿

松江藩内で生産され、他国へと流通する木綿は「雲州木綿」と呼ばれるブランド品でした。品質が高く「雲陽国益鑑」でも東の大関とされるほどの国益を生み出した一大産業として、京都や大阪、さらには遠く北陸の地にまで流通していったのです。

江戸時代 松江藩の木綿は、出雲国内の定められた場所のみに設置される「木綿市」で取引することと決められており、それ以外の場所での売買は藩により固く禁じられていました。木綿市は松江城下の白湯・末次をはじめ、宍道や本庄、そして出雲平野を中心に平田・直江・今市などの町に定期的に立てられました。



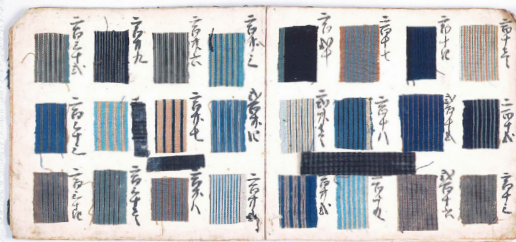
出雲国内の木綿市

(『松江市ふるさと文庫31』より転載)

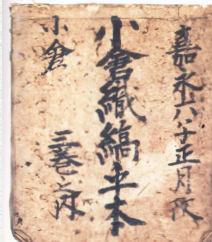
市日になると、生産者が織った木綿布を市に持ち込みます。まず町の役人により、基準を満たしているかを確認するため丈尺が測られ、合格した木綿のみが取引へと進みます。こうすることで一定の品質を保つ

ていたのです。取引木綿は仲買人により購入され、藩から委任された「荷宿（にやど）」と呼ばれる商人に流通税を支払った上で他国へと販売されていきました。

木綿にまつわる様々な関連産業も国益を生み出しました。「雲陽国益鑑」には、綿打弦（摘んだ綿をやわらかくする道具）、才賀町小倉（雑賀町の武家の内職であった縞織物）、駄別木綿口銭（木綿の流通税）、新屋丹蔵藍運上（藍染）、中町他国出し古手（他国へ売り出される古着）、在町古手（農村部の町から出される古着）などが名前を連ねています。また、安永7年（1776）の松江城下の座株の調査によれば、綿打座76軒、綿打弓弦



小倉織手本
松江市蔵



師6軒、紺屋97軒、その他に他国問屋座、実繰座、木綿仲買、縞小倉仲間などがあり、木綿にまつわる分業体制が確立してい

たことが伺えます（昭和16年『松江市誌』より）。

その後 江戸時代後期になり木綿が庶民衣料の主流となると、生産・流通はますます活発化していきます。次第に経済的効果の大きさから「町の存続の手段」として木綿市の設立を藩へ願い出る町が頻発しました。木綿市は木綿を集荷・流通させるだけでなく、町の中に人を集め、木綿以外の店商売を活性化させることにもつながっていたのです。

木綿生産・流通は明治に入ってからでも続けられました。木綿市はなくなりますが、島根県は木綿会社の設立を許可しその機能が引き継がれることとなります。明治16年(1883)の島根県の調査によれば、八軒屋町の松江港からは14万4千反の木綿が出荷されています（「意宇郡松江地誌」より）。しかし、手仕事を中心とする松江の木綿織産業は、次第に全国的な産業革命による機械生産の商品に押され、衰退していくこととなります。

歴史（そもそも） 日本に木綿が入ってきたのは14～15世紀頃です。中国や朝鮮半島からの舶来品として伝来する高級品で、その頃の日本における衣料は麻布が中心でした。次第に木綿の買入れが始まり、暖かく、吸水性が高いことから、当初は「兵衣」として用いられました。

その後、庶民にも木綿の性質が受け入れられ、麻に代わる衣料として需要が高まり、15世紀末には日本国内で生産が開始されました。江戸時代前期のうちに、関東から九州のほとんどの地域で木綿生産・木綿織が始まりました。

出雲国内の様子は、天和2年（1682）に岸崎左久次によって著わされた『田法記』の記述によれば、少なくとも15世紀末には自家消費用に木綿布が織られ、その余剰分を売って金銭に代えていたことが伺えます。

（小山 祥子）

📖【参考文献】

- ・小林准士著『松江市ふるさと文庫31「松平治郷（不昧）の治世—御立派改革後の松江藩政と藩領社会—』松江市、2022年
- ・『松江市史』通史編4「近世II」松江市、2020年
- ・藤原秀晴編『出雲木綿の歴史』報光社、2013年